園だより特別号２

高橋保育園
令和７年５月２２日
文責（中薗）

園長のつぶやき①

お世話になっています。３月まで，小学校や特別支援学校の教員をしておりましたので，不定期で子育てに関する園長のつぶやきを「園だより特別号」という形で，前回に続き，発行したいと思います。

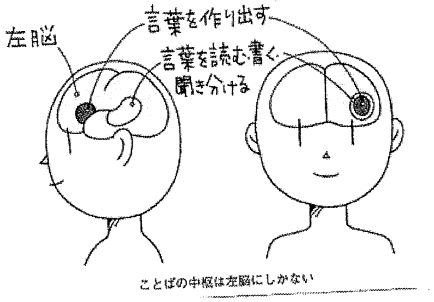
利き手の反対側の役割が大切！

生まれたばかりの赤ちゃんの「脳」は，まだ，左右の役割分担ができていません。それが，１歳を過ぎるころから，何となく「右利き」なり「左利き」の傾向が見え始め，３～４歳頃にははっきりしてきます。そして，７～８歳で，ほぼ大人のレベルに近い状態になります。身体部位と脳の左右はクロスしているので，たとえば，食事をするときに「右手」で持った箸は「左脳」からの命令によって操作され，「左手」で茶碗を持っているときには「右脳」がその指示を出しています。ここで大事なことは，**反対側の手の役割です。**右利きの場合は左手，左利きの場合は右手の役割が重要です。

私は，子どもたちと給食を一緒に食べていますが，ときどき，右手で箸やスプーンを持っているのですが，皿やお椀を支えるための「左手」が出てこない場合があります。「右手」で鉛筆やクレヨンを動かしているのですが，「左手」が出てこないときもあります。このような手は「利き手もどき」とも言われます。忘れていけないことは「非利き側」の手の役割です。「非利き側」は「利き側」より劣っているのではなく，「利き側」より効率よくはたらけるようにサポートする役割を担う側なのです。だから，「皿を支える」「紙を押さえる」といった役割を担います。その「左右分担」は左右の「脳」の働きによるものです。先ほど挙げたように，もし，右手しか使っていない子がいたとすると，それは左右の脳がまだ，しっかりとした「役割分担」ができていない，つまり「利き手」になり得ていない状態であると考えなければなりません。

この「役割分担」ができていないと「幼少期は，靴の左右を平気で間違える」「言葉の上でも左や右がよく分からない」「小学校３年生になっても左右反転した文字（鏡文字）を書いている」「漢字の偏とつくりを間違える」といった状態像を示しやすくなります。

そんな子どもたちに，ブランコを思いっきり揺らしてあげる，ぐるぐる回る遊びをふんだんにさせてあげる，トランポリンを何回も跳ばせる，といった活動をしばらく続けることで，言葉のトラブルが解消していくことがあります。



一般的に，日本人の場合，右利きは８８．５％，左利きは９．５％，両利き２．１％（大谷選手は右投げ左打ち）ほどになるそうです。なぜ，右利きが多いのでしょうか。一つの理由として，言語中枢は左脳にしか形成されないことが分かっています。どうして左右両方の脳に言語中枢がつくられないのかは分かっていませんが，人間だけが「利き側」を発達させること，人間だけが「優れた言語機能」を獲得できたことと無関係ではなさそうです。逆に右脳は，直感や，感覚，創造性を司る領域であり，左利きの人は感覚的な判断や，発想力が求められる場面で強みを発揮できます。どちらが優れているとは一概に言えませんね。

参考文献　「感覚統合が教えてくれたもの」木村　順